みつかる。つながる。よくなっていく。

毎月10日発行　第800号（通巻1304号）

東京YMCA

3
2023

創立1880年
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田２－３－18
日本キリスト教会館６階
Tel　03-6302-1960
URL　http://tokyo.ymca.or.jp
発行所　公益財団法人
東京ＹＭＣＡ
発行人　菅谷 淳

東京ＹＭＣＡの使命　東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

いまどきの子育てで大切なこと

第17回東京ＹＭＣＡ子育て講演会

講師：大豆生田（おおまめうだ） 啓友（ひろとも）さん

玉川大学教育学部教授、日本保育学会理事、日本こども環境学会理事、日本乳幼児教育学会理事、内閣官房「就学前のこどもの育ちに係る基本的な指針」に関する有識者懇談会委員（座長代理）、文部科学省「幼保小の接続期の教育の質的向上に関する検討チーム」委員、ＮＨＫ・Ｅテレ「すくすく子育て」出演、等

ＮＨＫ「すくすく子育て」等でお馴染みの大豆生田啓友さんが1月28日、第17回東京ＹＭＣＡ子育て講演会で「いまどきの子育てで大切なこと～幸せ子育てのコツ～」をテーマにオンラインで講演。子育て中の保護者や保育士など約２００人が参加しました。

子育てに関わるすべての人に楽しく幸せな子育てをしてもらいたい―。そのような願いのもと、東京ＹＭＣＡの会員有志と職員の企画運営により２００７年から開催している「子育て講演会」は今年で17年目を迎えました。「一人じゃないと思った」「涙が出て元気になれた」など、参加者の反響が大きかった第17回の講演内容を一部ご紹介いたします。

昔の方が良い お母さん？

「近頃のお母さんといったら……」。そんな否定的な声を時々耳にします。昔のお母さんの方が子どもとしっかり向き合っていたということでしょうか。

私はよく昭和初期のお母さん代表『サザエさん』にご登場願います。サザエさんは、夫の他に父母、弟妹と一つ屋根の下で暮らしています。すぐ隣には、いつでも出入り自由の伊佐坂先生のお家があります。他にも近所の人、親戚の人、商店街の人など、サザエさんの日常には多くの人物が登場します。結果として、彼女は息子のタラちゃんにいつもべったりなどしていません。

あちこちで見守られながら、タラちゃんもよく一人近所をぶらぶら散歩しています。一昔前には、周囲の自然環境や異年齢の子ども同士の関わりも含めて、子どもが独りでに育っていく条件が豊富にありました。しかし今日ではどうでしょう。何もかも一手に引き受けて、家の中で一人途方に暮れているお母さんがいかに多いことか。「頑張っているね」「そんなに自分を責めないで」と心の底から思います。

情報化社会の悲劇

昔と変わった子育て事情の一つに「情報化」が挙げられます。さまざまな情報を手軽に得られるのは便利なことですが、子どもにこれをさせろ、あれはさせるな等、不安を煽るような内容も多い。一方で、なかなか理論通りとはいかないのが子育てです。情報に溢れた今日の社会だからこそ「なぜ我が家だけ上手くいかないのか」と孤立してしまうお母さんも少なくないのかも知れません。

あっくんの事例から

私の専門の一つは、保育の実践研究です。色んな園に足を運び、子どもの姿をビデオカメラで追いながら、彼らの日常や成長の過程を明らかにしています。その中で繰り返し実感するのは、子どもが遊び込むことの重要性です。子どもは、遊びの中で大人には想像もつかないような経験を日々重ねています。

少し不器用な3歳児のあっくんは、彼なりに空き箱で工夫して作った〝剣〟を友達から「格好悪い」と言われてしまいます。誰にも見られないようにその剣をゴミ箱に捨て、しばらくしゅんとしていましたが、どうしてもヒーローごっこの仲間に入りたかったのでしょう。再び「よし！」と立ち上がり、新しい空き箱を探し始めました。その途端に先生から「お片付け」の号令がかかり、あっくんの挑戦は打ち切りとなりました。

子どもはこのように、遊びの中でこそ興味関心を広げ、多少の失敗にもめげずに試行錯誤を繰り返していきます。その過程で重ねる小さな成功体験が自信を育てることにもつながるのです。とは言えやはり、なかなか上手くいかないことや、誰からも理解されずに苦しむこともあります。そんな時こそ大人が見過ごさず、子どもが取り残されることのない社会にしたいものです。

こどもまんなか社会

子ども政策の司令塔として今年４月より新設される「こども家庭庁」。有識者懇談会委員の座長代理として私もこの準備に携わってきました。こども家庭庁は「こどもまんなか社会」をスローガンに掲げています。すべての子どもの健やかな育ちを保障するために、社会全体で一丸となって子どもを育てようとこの国は舵を切り始めるのです。

「こどもまんなか社会」のためには、子どもの声を聞くことが欠かせません。みなさんは『こどもかいぎ』というドキュメンタリー映画をご存知でしょうか。輪になって自由に話す子どもの様子を追ったこの作品は、深く思考し、大人が驚く発想を展開する子どもの実態や、なかなか話さない子どもの声を聞く大切さも明らかにしています。映画のメッセージはこども家庭庁における委員会の中でも分かち合われ、声にならない声にもきちんと耳を傾け政策決定に活かしていくことの重要性が確認されました。

民主主義の教育

すべての人が幸せに生きる鍵として「非認知能力」が今、世界中で注目を集めています。これは学力テストなどで計測できる認知的スキル以外の、認知化することが難しい心の動きや豊かさを指します。社会性や社会情動的スキルとも呼ばれ、具体的には「気持ちをコントロールする力」「人と関わる力」「目標に向かって頑張る力」などが含まれます。

非認知能力を開発する上でのポイントは「心の安全基地」を確保すること。身近に安心できる存在や心の拠り所があることが、心の育ちを左右するということです。誰かから優しくされ、心の安全基地が守られ、満たされていれば、人は他者を思いやることができます。心の安全基地はまた、他者と関わり力を合わせ、何かに挑戦する原動力にもなります。

子どもの主体性やその子らしさを尊重することも、非認知能力の向上には欠かせません。自ら関心を抱いたことに対して、人は集中力と忍耐力をもって取り組むことができます。この結果得られる成功体験が、自分を信じ新たな目標に向かう力にもなります。子どもが遊び込む経験の意義はここにも見出すことができるのです。

ああしろこうしろと強要してばかりでは、子どもの自信や興味の芽は育ちません。従来の形式にこだわらず、例えば発表会等の行事を子どもが主体的に取り組めるように変えていくことなどもできるでしょう。自分の意見が活かされ形になる経験は「自分たちで社会だって作り変えていける」という自尊心にもつながります。非認知能力の開発は、まさに市民性を育てる教育とも言えるのです。

最後にもう一つ。私が改めて声を大にして言いたいのは、お母さんたちは本当によく頑張っているということ。現代社会の一員として、心からの敬意と感謝をお伝えしたいと思います。そしてどうぞ、あまり無理をして自分を責めたりせずにいてください。これからの社会はみんなで支えていく社会です。

（まとめ・広報室）

大きな水たまりを発見して、予定を急遽変更。泥んこ遊びを楽しんだ年長児
（しののめＹＭＣＡこども園）

赤▽三角

1年ないしは2年間で、学生たちに提供できることは限られています。だからこそ、即効性のある知識や技術ばかりでなく、その後も続く人生の指針や拠り所となるものを見つけることをこそ支えたい―。そのような願いのもと、学生たちのすぐ側で一つではない答えを求めて一緒に悩み考えることに日々力を注いでいます▼「知性」「身体」と共に、「精神」の成長が大切であることはＹＭＣＡの正章である「赤三角」にも表現されています。ここには、進んで学び経験し、自分の頭でしっかり考えようというメッセージが込められていると受け止めています▼２０１７年、日本のＹＭＣＡは新しいブランドロゴ「ポジティブＹ」を作成しました。未来へ向かう前向きな力を表すこのロゴは、鳥が飛び立つ瞬間の姿をモチーフにしています。「赤三角」が「ポジティブＹ」に引き継がれたこの5年の間にも、笑いあり涙あり、さまざまな経験を重ねて数多の「赤い鳥」がＹＭＣＡから巣立っていきました▼若く眩しく輝く学生たちを前に、ほんの少しでも彼らの尊い人生に関われた喜びを今年も噛み締めています。ご卒業、おめでとうございます。

（にほんご学院　校長　望月　温）

YMCAピンクシャツデー2023

個性が尊重される社会を目指して

ピンク色の服を着て、いじめ反対をアピールする「ピンクシャツデー」※が今年も２月22日、２月第４水曜日に全国のＹＭＣＡで開催されました。東京ＹＭＣＡでも、職員や園児、学生たちが、工作やワークショップなど各部でさまざま工夫をしていじめを考える取り組みを行いました。

東陽町コミュニティーセンターでは、２月13日、ピンクシャツデーの一環として「ダイバーシティを考える」をテーマに講演会を開催。トランスジェンダーの当事者であり、社会体育・保育専門学校のＯＢでもある井上健斗さんを講師に迎え、個性が尊重される社会のためにできることを考えました。本紙では、井上さんご自身の体験に基づく講演内容をご紹介いたします。

講師：井上 健斗さん

24歳で性別適合手術を受け、戸籍上の性別を女性から男性に変更。2010年より株式会社G－pit設立。「世界中のトランスジェンダーが生きやすい未来に」を理念に掲げ、無料悩み相談や性別適合手術アテンド業他、各種メディアを通じたLBGTの認知向上にも注力する

自分なりの解を持つ

近ごろよく耳にするダイバーシティ（多様性）という言葉。「多様性を認め合おう」とキャッチコピーのように使われたりしますが、言葉だけが一人歩きしている印象を受けています。

多様性のある社会を実現するために、具体的には何ができるでしょうか。これは壮大な社会テーマで、答えはきっと一つではない。大人も子どもも一人ひとりが自分なりの解を持つことが何より重要だと思います。

強制スカート時代を経て

小学生の頃から自分は男の子だと思って育ちました。一人称はオレ、好きな遊びはサッカーにスケボー。ただ、ものすごい違和感を抱きつつも自分が女の子の枠の中にある自覚はありました。「スカートをはきなさい」「髪を伸ばしなさい」と言われる度に自分を否定されているような気持ちになりましたが、理由がよく分からず黙るしかありませんでした。

自信のない悲しい気持ちのまま迎えた中高の「強制スカート時代」。周囲の男女差が広がり、自分の中でも違和感がどんどん膨らんで一番苦しい時期でした。この頃から自殺を考えはじめ、不登校も経験。傍から見たらスポーツ好きの闊達な女の子だったので、先生も驚いて家まで会いに来てくれました。結局その時もモヤモヤをうまく言語化できず、押し黙るしかありませんでした。

中学2年生の頃、ある転機が訪れます。同級生の女の子に恋愛感情を抱いている自分に気付いたのです。ＬＧＢＴという知識も何もありませんでしたので「同性愛者だった」というショックより「モヤモヤの正体がやっと分かってすっきりした」という気持ちが勝りました。仲の良い女友達に打ち明けようとしましたが、ここである事件が起こりました。たまたま校内で後輩のレズビアンカップルがキスをしていたという噂が全校に広まったのです。周囲の反応は揃いも揃って「変態」「気持ち悪い」「レズが移るから近寄るな」。あのとき受けた衝撃は今でも忘れられません。信頼する女友達が隣でこぼした「ああ、私もレズとか苦手だな…」の一言にとどめを刺され、自分の気持ちにぴたっと蓋をしました。

はじめて希望を感じた

その後は「自分は気持ち悪いんだ」「失敗作なんだ」と、未来に一切の希望を持てずにいました。成人・就活・結婚・出産などのライフイベントには、いちいち性別の問題が絡んできます。これはこれと割り切って、人生を考えることなどできません。先が見えず、右も左も真っ暗に感じられて何度も死のうと考えました。ここまで追い込まれる経験もそうないので、共感することはなかなか難しいかも知れません。

例えば今、ポンと肩を叩かれた瞬間に中身は自分のままで、外見（体）だけ異性に変わったと想像してみてください。「あなたはどう見ても女性ですから、男性と恋愛してください。お化粧もしてくださいね」と周囲から言われ、すぐに気持ちを切り替えその通りにできるでしょうか。心と体の性が違うなどありえないと言われることもありますが、そのありえない現実に苦しむ人は確かに存在します。

僕が自分らしく生きる道を選んだきっかけは、父が癌で亡くなったこと。人生は有限であることを実感し、悔いの無いように生きようと治療を決断しました。そこで一気に250人くらいにカミングアウトしたところ、予想外のことが起こりました。ほとんどの人が「話してくれてありがとう」「今までと何も変わらないよ」と言ってくれたのです。22歳にして、初めて生きる希望を持つことができました。

ギャップを埋める

以上は、あくまで僕個人のストーリーです。「トランスジェンダー」と呼ばれる人も決して一様ではなく、個々の置かれた環境や課題もさまざまです。ただ、当事者として実感していることは、ＬＧＢＴとそうでない人との間には大きな認識のギャップがあること、そして、そのギャップによって追い詰められる人が少なくないということです。

例えば、「化粧しないの？」「荷物持つよ」「彼氏いるの？」などは、思春期の僕が言われる度に落ち込んでいた言葉です。悪意のない何気ない言葉ですら、当事者を深く傷つけることもあるのです。「気の迷いでしょ」「ウケる」「種の保存に反する」などは、ことに性別の悩みを抱える10代には、死をも覚悟させるような破壊的なダメージを与えます。こうしたギャップをどう埋めていくかは、社会全体の大きな課題と言えます。

ＬＧＢＴＱ＋

ＬＧＢＴに、今は「Ｑ＋」と新たに加えて用いることもあります。「Ｑ」は、クエスチョニングやクイアの頭文字で「性別を特定しない」「ＬＧＢＴにも当てはまらない」人を表します。さらに「＋」は、そのいずれとも定義しがたい、例えば内外性器が男女のどちらなのか判別しづらい人などにも用いられます。こうした分類を一つひとつ覚えることが大事なのではありません。ポイントは、性別とは男女の二つで捉えきれるものではないと知ることです。

そもそも「ＬＧＢＴ」という言葉自体、僕はどこか釈然としません。「ＬＧＢＴの人たち」と一括りにされたりしますが、困難の傾向はそれぞれに異なり一枚岩ではまったくない。これは本来ごくあたり前のことで、一人として同じ人はいません。この大前提を忘れたカテゴリー化は、視界と思考を曇らせます。「ＬＧＢＴの人など身近にいない」「聞いたことがない」という声もよく聞かれますが、そうした誤解がカミングアウトしにくい雰囲気を作り、当事者の困難がなかなか伝わらないという悪循環が生まれています。

ちなみに、カミングアウトする・しないは当人の自由ですが、したいけどできないという現状は変えていく必要があります。そして、あたり前にいる存在という認識が共有されているか否かで生まれる差は大きなものです。

カミングアウトされたら

身近な人からカミングアウトされたら、どうすればいいかとよく聞かれます。先ずは「ありがとう」とぜひ伝えてあげてください。社会の寛容性が高いとは言えない中で、当事者の多くはカミングアウトに大きな恐怖を感じています。カミングアウトは、相手への信頼の証でもあり、その一言で当事者は安心できます。驚いたことや分からないことは、素直に伝えていいと思います。妙に気を遣ったり、態度を変えたりせずに、普段通りに接することが肝心です。

反対に、絶対にやってはいけないことがアウティング（暴露）です。告白を受けた友達が、そのことをグループラインに流した結果、当事者が自殺をしてしまった事件もありました。ここにも当事者と周囲の認識のギャップが垣間見えます。

ＬＧＢＴだから特別扱いをしてほしいというつもりはありません。言葉選びが難しいのは、誰が相手でも同じこと。人間関係に誤解や摩擦はつきもので、これらを含めてコミュニケーションを蓄積する中で互いに理解を深めていくのだと思います。

多様性を守り抜く

さて、本日のテーマは「ダイバーシティを考える」です。ダイバーシティが大事なのは分かりますが、実際は何をすればいいのでしょうか。ご参考に僕なりの答えを提示したいと思います。この答えにたどり着いたのには、僕自身の苦い経験があります。過去に身近な人からトランスジェンダーであるという理由だけで、まるで鬼か悪魔かのような扱いを受けたのです。その時は完全にシャットアウトされ、自分をきちんと伝えようと尽くしましたが、何も届きませんでした。悲しみの中で深く考えて、相手にも相手なりの正義があったこと、そして、人はそのつもりはなくても誰かを傷つけてしまうことがあることに気付きました。

「差別はいけない」と言われ続けて無くならないのも、差別をしている当人にその自覚がないことが原因の一つにあるのだと思います。

こうした経験も踏まえて、一人ひとりが積極的に「知る・想像する・関わる」ことが、ダイバーシティを保障する鍵だと考えています。これを一言で表現すると「思いやり」になります。

一方で、「思いやり」も「多様性」も、言葉は綺麗でシンプルですが、実際には人の弱さやズルさと向き合うことなども含め、苦しみながら固守していく類のものだと思います。それでも、意志を持って知り、想像し、関わることは、誰もが取り組めることであり、そうした心構えがより良い社会のためには重要です。

最後に一つお願いがあります。僕の話をぜひ身近な人とシェアしてください。できる限り明るく前向きな雰囲気の中で。人の笑顔や肯定的な雰囲気は、水の波紋のように広がっていきます。否定ではなく、肯定の輪を一緒に広げていきたいと願っています。

（まとめ・広報室）

※「ピンクシャツデー」とは

カナダ発の世界的いじめ反対運動。ピンクシャツを着た少年がからかわれたことに対して、友人たちが同じようにピンクシャツで登校して抗議の意志を示したことに始まる。いじめや差別の問題に「自分事として」向き合うために、ＹＭＣＡでも関連する活動を毎年行っている。

全国ＹＭＣＡの取り組みはこちら

にほんご学院スピーチコンテスト

日本での発見や夢 生き生きと

2月10日、にほんご学院は毎年恒例のスピーチコンテストを開催しました。9カ国34人の在校生から選抜された代表7人の力強いスピーチは、コロナ禍の入国制限など困難を経験する学生や学校関係者を含む来場者を大いに励ましました。

写真中央が、サン ティリ ヤダナ マウンさん

慣れない地でさまざまな経験と思考を重ねる日々の様子が伝わるスピーチに「希望を感じた」「こちらが勇気をもらった」と、審査員からも称賛の声が上がりました。受賞者と最優秀賞（上級の部）のスピーチ要旨をご紹介いたします。

■最優秀賞（上級の部）
「失敗は成功のもと」
サン ティリ ヤダナ マウン（ミャンマー出身）

みなさんは、それぞれ夢を持って日本に来ています。その夢に向かう過程で、大変なことやもうできないと思うこともあるでしょう。そんなとき、どのように困難をのりこえたらいいでしょうか。

私は無事に日本に来れたとき、目の前のすべてが夢みたいでわくわくしました。母国で日本語を3年間勉強していたので、日本でもやっていけると思っていました。でも、それは間違いでした。

私は今、日本のあるスーパーでアルバイトをしています。「スーパーのレジなんて簡単でしょ」と思うかも知れませんが、日本に来たばかりの私には簡単ではありません。支払い方法は複雑だし、うまくバーコードが読み取れないこともあります。あるときお客様の希望とは違う支払い方法で対応して「オマエ日本語分からないのか」と言われてしまいました。それから仕事に行くことが怖くなり、またミスしたらどうしようといつも不安でしたが、職場のリーダーの一言で私は変わりはじめました。「誰でもミスはします。10年働いている私もミスをしますが、1回ミスしたことは忘れにくいです。ミスをすると仕事をもっと覚えるようになるんですよ」。

ミスをするのはあたり前で、繰り返さないようにすればいいのだと分かってから、仕事が楽しくなりました。みなさんも、失敗から逃げたいと思うことが多いことでしょう。ただ、失敗という結果だけに目を向けては成長はできません。

人はみんな、最初は新人であり、未経験であり、無知です。進んで行動し挑戦しても、うまくいくばかりではありません。しかし大事なのはこの先です。失敗の原因を確認し、同じ失敗をしないように努力すれば、新たな成功に近づくことができるんです。なかなかできなくて、イライラして途中で投げ出したくなることもありますが、苦しんでいるのは一人だけではありません。私たちを応援してくれる人や、愛する人たちのことを思って一緒に頑張りましょう。

■最優秀賞（中級の部）
「最高のシェアハウス」
マリヤッパン　ラジュクマール（インド出身）

■東京ワイズメンズクラブ賞
「困難を克服する」
グエン　ティ　マイ（ベトナム出身）

■東京世田谷ワイズメンズクラブ賞
「失敗は本当に失敗ですか」
ヴォ　ティ　ヒュエンチャ（ベトナム出身）

総主事カフェ

東京ＹＭＣＡ総主事　菅谷　淳

総主事カフェにようこそ。

母の三回忌に叔父（母の弟）からショッキングな話を聞きました。

生前、若い頃のことはあまり話さなかった母。亡くなった父とはお見合いで知り合ったとだけ教えてくれました。しかし叔父によれば、山登りが好きだった母には結婚寸前で破談となった登山仲間がいたとのこと。大学教授だったその人と貧乏な母の実家とでは家柄が釣り合わず、二人は泣く泣く結婚を諦めたようです。

６人兄弟の長女だった母は、病弱な祖母に代わって毎朝家族全員の食事の支度をしていました。我慢強く弱音を吐かない母でしたが、愛した人と強制的に別れなければならなかった時は心が悲鳴を上げていたことでしょう。

母の女性としての知られざる過去と、その縁談がまとまっていれば自分は生まれていなかったという事実とに、複雑な思いで叔父の話を聞きました。

家柄が結婚のネックになるという話は、現代ではあまり聞かなくなりました。それでも出身や身なり、学歴、収入等による差別はいまだになくなりません。

先日、東日本地区ＹＭＣＡのスタッフ研修会で川崎区桜本にある社会福祉法人「青丘社」を訪ねました。在日コリアン集住地域にある青丘社は、誰もが尊厳をもって安心して生きられる多文化共生社会を作る活動を精力的に行っています。

日本人と外国人、お金持ちと貧乏人、健常者と障がい者、勝ち組と負け組……。いとも簡単に引かれてしまう境界線を消すことは、途方もない仕事です。

この地で在日コリアンに対するヘイトスピーチが行われた際に、あるおばさんが言った言葉が印象的でした。「あなたたちそんなこと言ってないで、こっちで一緒にご飯でも食べよう」。罵詈雑言が飛び交う中で、その一言は私たち研修生の記憶に残ることとなりました。

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタイ５・44）。

頑固な境界線をなくすためには、やはり「愛」しかないようです。

東京ーNY　フロストバレー便り

＊ニューヨーク近郊の日系人を対象にキャンプ等を行なっている「東京-フロストバレーYMCAパートナーシップ」。現地に出向中のスタッフのお便りを紹介します。

この春、フロストバレーYMCAで20年間CEOを務めたジェリー・ハンコスキー氏が退任した。ウィスコンシン州のキャンプ場でYMCAでのキャリアをスタートしたハンコスキー氏は、その後、グレーターニューヨークYMCA、ロードアイランド、ダラスでYMCAキャンプのプロフェッショナルとして活躍、2003年フロストバレーYMCAのCEOに就任した。

就任後は、持続可能な運営を築くために数々の寄付キャンペーンを展開。その資金でキャンプを拡張して参加者数を大幅に増やすことに成功した。子どもたちが動物の世話や農作業を体験的に学ぶファームキャンプや、乗馬に特化したキャンプなどもその一例である。ヘルスセンターの建て替えにもいち早く着手した結果、人工透析プログラムの継続が保障され、子どもの健康状態に関わらずキャンプを提供できるようになった。

近隣の子どものデイキャンプや放課後プログラムなど地域活動にも精力的に取り組み、コロナパンデミックの際には学校に通えない子どもが集える場所を提供し続けた。この２年間は厳しい運営を余儀なくされたが、コロナ禍でも創意工夫してプログラムを維持し、参加者20%への経済的支援も堅持した。

我々駐在スタッフのことも常に気にかけてくれたハンコスキー氏は、2010年に東京YMCAを公式に訪問。その熱心な働きによって双方の絆はさらに深まり、東京ーフロストバレーYMCAのプログラムは、強固なパートナーシップに基づく国際協力事業として現在に至っている。

氏の献身的な取り組みと情熱的なリーダーシップは、ソフト面、ハード面ともに北米YMCAを常にリードするキャンプ場としての地位を確立している。コロナ禍のため延期となった退任セレモニーは、今夏行われる予定である。心からの感謝をお伝えしたい。

（東京ーフロストバレーYMCAパートナーシップ　星住秀一）

日本ＹＭＣＡユースボランティア認証者

東京ＹＭＣＡでボランティアをしている下記の29人が「日本ＹＭＣＡユースボランティア」として認証されました。これは①16～35歳で、②半年以上の活動経験があり、③ボランティアの研修を受け、所属ＹＭＣＡから推薦された方を対象とするもので、今年は全国で330人が認証されました。日ごろのご活躍に感謝いたします。

磯部　匡基	久保田　智梨	高橋　治希	山谷　みのり
伊藤　桜子	小宮　萌々子	野口　玲奈	山中　綾乃
今村　将健	酒井　彩也子	信田　詩織	山本　花奈
上田　晴愉	先山　智	蓮沼　孝明	和田　佳凛
大島　夕果	篠原　真奈	姫井　野乃加	渡邉　紫乃
大瀧　ほの香	関根　万葉	藤野　美緒	
岡野　弘武	高田　奈々	三木　めぐみ	
奥　美月	髙橋　七菜	安岡　駿也	

ユースボランティア募集中！

YMCAの「ユースボランティアリーダー」に仲間入りしませんか？詳細はHPで。ＹＭＣＡボランティア活動の魅力、先輩ボランティアの声など、ぜひご覧ください。